

圃場管理システム

10分間隔の圃場のデータを知らせる。

パソコン

スマホ

データをもとに圃場ごとに適切な処方促す。

気象環境は圃場ごとに違う。温度や湿度等のデータを解析しながら圃場ごとに適切な処方を行うことで品質・収量を安定させる。

技術がもたらす 強い6次産業化

勘と経験からの脱却。

商品づくりの基盤を強固にする6次産業化の現場から

異業種の企業や研究機関、大学等との連携により、高い技術力を取り入れることで、生産性の向上や商品の高付加価値化を実現しようとする取組が増えている。

今回は、大手IT企業と共同で開発したシステムで、自社のみならず地域の農業生産現場に変革をもたらしつつある奥野田葡萄酒醸造株式会社と、創業時より商品化プロセスの過程で県の研究所や大学、そして地域の協力を得て、生産・加工・成分分析などを進め、商品価値の向上を図る有限会社碧山園を紹介する。

ICTを活用し、 良質なブドウ作りを目指す。

奥野田葡萄酒醸造株式会社(山梨県甲州市)

センサーや無線ネットワークを活用して、
効率良くデータを収集し、
高精度な生育管理システムを構築。



2015年春、醸造場から徒歩2分の場所に新しく「奥野田ガーデンテラス」が誕生。圃場に集う人々とワイングラスを傾けながら作業の疲れを癒す和みの空間だ。ワインにまつわるさまざまなイベントも開催予定。



奥野田葡萄酒醸造株式会社
代表取締役
なかむら まさかず
中村 雅量さん(53)



山梨県富士河口湖町生まれ。東京農業大学醸造科でバクテリアを研究。1985年に中央葡萄酒(株)に入社し、海外研修や国の醸造試験場への出向などの経験を経て、ワイン製造の生産管理者に就任。1989年に独立し、奥野田葡萄酒醸造(株)を引き継いだ。妻の亜貴子さんと二人三脚で世界一のワイン作りを目指し、海外からの評価も高い。

「『^{※2}やまなし企業の農園づくり』制度を活用して、富士通さんの社員に社会貢献していただく事業を山梨県の農政部が計画し、私たちがつないでくれたのが始まりです」と、奥野田葡萄酒醸造株式会社(以下、奥野田

小さなワイナリーを訪れた大企業との幸せな出会い
微生物の性質を活かして、高品質なワイン作りを目指す山梨県甲州市のワイナリーのブドウ畑に「富士通GP2020ワインファーム」と名付けられた二画がある。ここでは、富士通株式会社の社員やその家族がボランティアでブドウの育成に汗を流す。

「『^{※2}やまなし企業の農園づくり』制度を活用して、富士通さんの社員に社会貢献していただく事業を山梨県の農政部が計画し、私たちがつないでくれたのが始まりです」と、奥野田葡萄酒醸造株式会社(以下、奥野田

ワイナリー)・代表取締役の中村雅量さんは当時を振り返る。奥野田ワイナリーと富士通は協定を結び、農地の有効利用を図りながら、地域の活性化や地域間交流を図る活動を2010年からスタートさせた。

※1 富士通GP2020ワインファーム
富士通グループが、環境・社会貢献活動の一環として、地域貢献や生物多様性保全を行いつつ、社員の意識啓発を図るため、奥野田ワイナリーと協働して運営するブドウ畑。

※2 やまなし企業の農園づくり制度
山梨県内の農業・農村の活性化に向けて、農村地域と企業が協働活動を進めることを県が支援していく制度。

